

## かわいそうなオオカミの親子

昔々、烏帽子岳の麓に、森が広がっていました。そこには、キツネやタヌキ、クマやオオカミ、モグラやリスにウサギなどのたくさんの動物が住んでいました。

ところが、新田を切り開くために、小作人達は森の木を次々と切り倒し、根を掘り起こし、どんどん田畑を広げていきました。おかげで、森はどんどん狭くなりました。森の動物たちは住処がなくなり、えさも少なくなりました。

そんな時に、オオカミが5匹の子供を産みました。子供を育てるために母オオカミはいつも腹をすかせていました。子供達も大きくなるとえさをたくさん食べるようになりました。

母オオカミは、しかたなく小作人達の小屋へ入って、ニワトリやウサギを盗むようになりました。小作人達は、怒ってオオカミを捕まえてこらしめてやりたいと思いました。

子供のオオカミたちも母オオカミといっしょにえさを探して歩くようになりましたが、えさはなかなか見つかりませんでした。

母オオカミは、また小作人達が働いている新田に下りて来ました。そこでは、かわいい赤ん坊がエンツコに入ってぐっすりと眠っていました。オオカミは赤ん坊に近づくと胸にくらいつき、引きずり下ろしくわえて逃げました。

驚いた赤ん坊は泣き叫びました。激しい泣き声に父親も母親もびっくりして振り向くとオオカミが子供をくわえて逃げて行くのが見えました。二人は懸命にオオカミの後を追いかけてました。

ほかの小作人達も鍬や鎌を持って追いかけてました。

オオカミは赤ん坊をくわえては逃げきれないと思い、岩の陰に赤ん坊を隠して逃げ去って行きました。

母親が赤ん坊を見つけたとき、赤ん坊の体には、きばのキズや岩や木にぶつかったあとがはれあがって死んでいました。父親と母親は可愛い赤ん坊を亡くして、悲しく淋しくて、毎日泣いていました。

父親も母親も小作人達みんなは、オオカミを、心から憎らしく思い、かたきうちをしたいと思いました。

2メートルの広くて深い穴をほって木の枝をかぶせて、罠を作りました。

おとりのニワトリをつないでおくと、お腹を減らした5匹の子供のオオカミ達がニワトリにとびついで次々と罠に落ちました。

オオカミの子供達は

「ウォー、オオー」

「キャン、キャン」

と鳴き叫び、母オオカミを呼びました。

子供達の泣き声を聞きつけた母オオカミは走って来て、罠の底にいる子供達を見つけました。罠の周りを行ったり来たりして、前足をのばし、

「クンクン、クンクン」

と悲しい声で子供達を呼びました。

子供を助けようと前足と一生けん命に伸ばしたとき、母オオカミも滑るように罨に落ちてしまいました。

しばらくするとオオカミの声が聞こえなくなりました。

小作人達は、罨に近寄って見ました。

罨の底で、母オオカミが5匹の子供を抱きかかえるような姿で死んでいました。その顔は子供達を見守っている優しく静かな母親の顔でした。

小作人達は、母オオカミが子供を思う気持ちは、人間と同じだと気づき、しだいに憎い気持ちよりも親子のオオカミがかわいそうになりました。小作人達みんなで、かわいそうなオオカミの親子の墓を作りました。

そして、きれいな花とニワトリやウサギの肉を供えてあげました。

このことがあった後からは、野辺地の辺りではオオカミを見ることはありませんでした。

どっとはらい